# MODERN JAZZ TOP 30+ RECOMMENDED ALBUMS

## はじめてのモダン・ジャズ おススメLPベスト30+



音楽ジャーナリスト
**小川隆夫**
リコメンド




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Birth Of The Cool**

1949 ～ 50 年に録音された、「クール・サウンド」の名盤。ホーン・アンサンブルを生かした緻密な響きは、それまでのビバップとは異なるジャズの可能性を示した。マイルスの美意識と革新性が、すでにここにはっきりと表れている。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Dig**

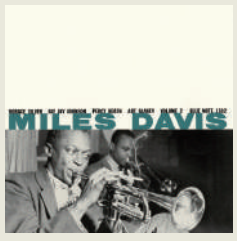
1951 年録音。若きマイルスが、ジャッキー・マクリーンやソニー・ロリンズたちと繰り広げる、勢いに満ちたハード・バップ。マイルスのトランペットには荒々しさが残る。一方、フレーズの端々には後年に繋がる独特の間合いが感じられる。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Miles Davis Allstars Vol.1 (Blue Note)**

ブルーノートに残した初期のセッションを収録。J.J. ジョンソン、ジミー・ヒース、ギル・コギンズらを迎え、ビバップの語法を基盤に独自のスタイルを模索するマイルスの姿が浮かび上がる。後年の抑制された表現に通じる個性も聴き取れる。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Miles Davis Allstars Vol.2 (Blue Note)**

ブルーノートに残した 3 回のセッションから、若きマイルスの魅力を伝える一枚。なかでも、ホレス・シルヴァー、パーシー・ヒース、アート・ブレイキーとの 1954 年のカルテット録音が重要。鋭いフレーズと抑制の利いた歌心が、ハード・バップの躍動とバラードの哀愁を鮮やかに描き出す。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Cookin'**

1956 年録音の「プレスティッジ 4 部作」の一枚。ジョン・コルトレーン、レッド・ガーランド、ポール・チェンバース、フィリー・ジョー・ジョーンズとのクインテットが、スタンダードを中心に最高の演奏を聴かせる。力みのないマイルスのソロと、4 人の絶妙な呼吸が魅力を放つ。



### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Round About Midnight**

1955 ～ 56 年録音。コロムビア移籍後の第一作で、ジョン・コルトレーンを加えた新生クインテットの出発点となった。タイトル曲をはじめ、マイルスの抑制された美しい音色が際立つ。ハード・バップの枠を超えようとする気配が時代を感じさせる。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Ascenseur pour l'échafaud** *(死刑台のエレヴェーター)*

1957 年、ルイ・マル監督の映画のためにパリで録音。映像を見ながら即興で音楽を作り上げた異色作で、暗く都会的な雰囲気が漂う。マイルスのトランペットが、夜のパリを彷徨うように、静かに響いてくる。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Milestones**

1958 年録音。モード・ジャズへの本格的な転換点となった重要作で、ジョン・コルトレーン、キャノンボール・アダレイ、レッド・ガーランドたちとの演奏が収められている。タイトル曲に代表される新しいアプローチは、マイルスの音楽が次の段階へ進んだことを明確に示した。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Kind Of Blue**

1959 年録音。ジャズ史上もっとも広く聴かれてきた名盤のひとつで、モード・ジャズの可能性を決定的に示した。マイルス、ジョン・コルトレーン、キャノンボール・アダレイ、ビル・エヴァンス、ポール・チェンバースによる演奏は、静けさと緊張感を併せ持ち、何度聴いても新たな発見がある。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Sketches Of Spain**

1960 年録音。ギル・エヴァンスとの共同作業から生まれた、スペイン音楽が題材の壮大な作品。マイルスのトランペットは、華麗なオーケストレーションの中でも鮮烈な存在感を放つ。ジャズとクラシックの境界を越えた傑作。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Someday My Prince Will Come**

1961 年録音。ハンク・モブレーとゲストのジョン・コルトレーンが参加した作品で、マイルスのトランペットが一段と深い表情を見せる。表題曲をはじめ、スタンダードを中心とした選曲も魅力。60 年代初頭のマイルスの美学を知るうえで格好の一枚になった。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**My Funny Valentine**

1964 年のニューヨーク・コンサートを収録。ジョージ・コールマン、ハービー・ハンコック、ロン・カーター、トニー・ウィリアムスとのクインテットが、静かな緊張感に満ちた演奏を繰り広げる。表題曲はとくに印象的で、音数を抑えながら深い感情を表現している。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Miles In Tokyo**

1964 年、日本で行なわれたライヴ・コンサートを収録。サム・リヴァース、ハービー・ハンコック、ロン・カーター、トニー・ウィリアムスと組んだクインテットが、この時点におけるマイルス・ミュージックの最新形を日本の聴衆に披露した。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**E.S.P.**

1965 年録音。ウェイン・ショーター、ハービー・ハンコック、ロン・カーター、トニー・ウィリアムスのクインテットによる代表作で、複雑な楽曲と自由度の高い演奏が特徴。マイルスも従来とは異なるフレーズを聴かせ、5 人のインタープレイが、新しいジャズの姿を示す。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Nefertiti**

1967 年録音。マイルスがソロよりもアンサンブルそのものに重点を置いた、60 年代クインテットの重要作。表題曲では管楽器が同じフレーズを繰り返す一方、リズム・セクションが自由に動く。のちのフュージョンを予感させる大胆な構成が興味深い。




### Miles Davis
マイルス・デイヴィス

**Filles De Kilimanjaro**

1968 年録音。ウェイン・ショーター、ハービー・ハンコック、ロン・カーター、トニー・ウィリアムスのクインテットと、チック・コリア＆デイヴ・ホランドのニュー・クインテットによる、エレクトリック期へ向かう過程を捉えた作品。

RECOMMENDED BY
TAKAO OGAWA

# MODERN JAZZ TOP 30+ RECOMMENDED ALBUMS





## Miles Davis
マイルス・デイヴィス

### *Bitches Brew*

1969 年録音。ジャズ、ロック、ファンク、電子楽器を大胆に融合し、マイルスの音楽を新たな領域へ押し広げた問題作。複数のミュージシャンによる集団演奏を編集によって構築したサウンドも画期的で、ジャズの概念そのものを変えた。



## Miles Davis
マイルス・デイヴィス

### *Get Up With It*

1969 ～ 74 年の録音をまとめた大作。エレクトリック期のマイルスが残した多様な音楽性を俯瞰できる作品で、静謐な〈ヒー・ラヴド・ヒム・マドリー〉から激しい〈レイテッド X〉まで、幅が広い。長大な演奏の中に、後期マイルスの独特な世界が凝縮されている。



## Miles Davis
マイルス・デイヴィス

### *Agharta*

1975 年、大阪公演を収録したライヴ盤。マイルス、ソニー・フォーチュン、ピート・コージー、レジー・ルーカスなどによる7重奏団が、ファンクを基盤に創造的な音の塊を作り上げる。オルガンやギター、ドラムスが激しくぶつかり合い、エレクトリック・マイルスの到達点のひとつとなった。



## Miles Davis
マイルス・デイヴィス

### *You're Under Arrest*

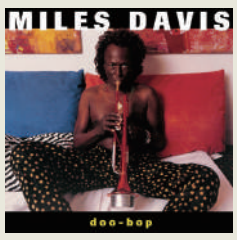
1985 年録音。マイルスがポップ・ミュージックとの距離を縮めた作品で、マイケル・ジャクソンやシンディ・ローパーの曲も取り上げている。鮮やかなエレクトリック・サウンドの中にあって、マイルスのトランペットは相変わらず独特で、80 年代の姿を象徴する一枚。



## Miles Davis
マイルス・デイヴィス

### *TUTU*

1986 年録音。マーカス・ミラーのプロデュースとベースを軸に、シンセサイザーやドラム・プログラミングを駆使して作られた作品。マイルスは最小限の音数で強烈な存在感を示す。時代のサウンドを取り込みながら、自分の個性を失わない姿勢が鮮やか。



## Miles Davis
マイルス・デイヴィス

### *Doo-Bop*

1991 年録音。ヒップホップのビートとマイルスのトランペットを結びつけた、最後のスタジオ作品。イージー・モー・ビーとの共同作業によって、ジャズと新しいブラック・ミュージックの接点を探った。未完成の部分も含め、最後まで挑戦を続けたマイルスの姿がある。



## Cannonball Adderley
キャノンボール・アダレイ

### *Somethin' Else*

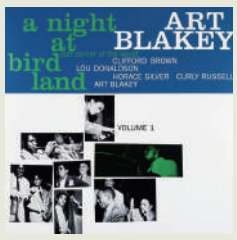
1958 年録音。キャノンボールを中心に、マイルス・デイヴィス、ハンク・ジョーンズ、サム・ジョーンズ、アート・ブレイキーが共演したハード・バップの名盤。マイルスが参加したことでも知られるが、主役はあくまでキャノンボール。〈枯葉〉でのマイルスが素晴らしい。



## Art Blakey And The Jazz Messengers
アート・ブレイキー

### *Moanin'*

1958 年録音。ベニー・ゴルソン、リー・モーガン、ボビー・ティモンズ、ジミー・メリットによるザ・ジャズ・メッセンジャーズの代表作。〈モーニン〉をはじめ、ファンキーで力強い楽曲が並ぶ。5 人の個性がぶつかり合いながら、抜群のまとまりを聴かせる。





## Art Blakey
アート・ブレイキー

### *A Night At The Birdland Vol.1 / A Night At The Birdland Vol.2*

1954 年、「バードランド」で録音されたライヴの名盤。ブレイキーの強烈なドラミングを中心に、クリフォード・ブラウン、ルー・ドナルドソン、ホレス・シルヴァーたちが若々しい演奏を繰り広げる。ハード・バップが生まれた時代の熱気を、そのまま閉じ込めたような臨場感が魅力。



## Clifford Brown
クリフォード・ブラウン

### *Clifford Brown With Strings*

1955 年録音。ブラウンの輝かしいトランペットをストリングスと共演させた人気盤。華麗なアレンジの中でも、ブラウンの音色は少しも埋もれない。激しいビバップとは異なる、端正で美しい魅力が味わえる傑作。



## Dave Brubeck
デイヴ・ブルーベック

### *Time Out*

1959 年録音。〈テイク・ファイヴ〉で知られる、ジャズ史を代表するヒット作。ブルーベックのピアノとポール・デスモンドのアルト・サックスを軸に、変拍子を積極的に取り入れながら、聴きやすい音楽に仕上げた。ジャズの可能性を広げた画期的な作品。



## Paul Chambers
ポール・チェンバース

### *Bass On Top*

1957 年録音。チェンバースがリーダーとして残した代表作で、ピアノ・トリオを基本に、ケニー・バレルやハンク・ジョーンズらが参加。ベースを単なる伴奏楽器ではなく、メロディ楽器として前面に出した演奏が印象的。チェンバースの豊かな音色とスウィング感が堪能できる。



## Sonny Clark
ソニー・クラーク

### *Cool Struttin'*

1958 年録音。クラーク、アート・ファーマー、ジャッキー・マクリーンたちによる、ハード・バップを代表する一枚。表題曲の印象的なリズムとメロディはもちろん、全編に漂うクールで粋な雰囲気が魅力。ブルーノートらしい音作りも含めて楽しみたい。



## Ornette Coleman
オーネット・コールマン

### *The Shape Of Jazz To Come* (ジャズ来るべきもの)

1959 年録音。コード進行に縛られない即興演奏によって、ジャズの新しい可能性を示した歴史的作品。コールマンとドン・チェリー、チャーリー・ヘイデン、ビリー・ヒギンズの演奏は自由だが、無秩序ではない。タイトルどおり、これからのジャズを予告した一枚。



## John Coltrane
ジョン・コルトレーン

### *Giant Steps*

1959 年録音。複雑なコード進行を持つ表題曲などに挑み、コルトレーンの驚異的な技巧と発想力を刻んだ名盤。マイルスの下を離れ、独自の道を歩み始めた時期の作品で、のちのジャズ・ミュージシャンにも大きな影響を与えた。

RECOMMENDED BY
TAKAO OGAWA

# MODERN JAZZ TOP 30+ RECOMMENDED ALBUMS






## Chick Corea
チック・コリア

**Return To Forever**

1972 年録音。チック、ジョー・ファレル、スタンリー・クラークらによる初期リターン・トゥ・フォーエヴァーを代表する作品。ラテン音楽を基盤にしながら、ジャズの即興性を生かしたサウンドが新鮮。のちのフュージョンとは異なる、透明感のある音楽性が魅力。




## Bill Evans
ビル・エヴァンス

**Waltz For Debby**

1961 年、「ヴィレッジ・ヴァンガード」でのライヴ盤。エヴァンス、スコット・ラファロ、ポール・モチアンのトリオが、静かな緊張感の中で繊細な対話を繰り広げる。表題曲に聴かれる美しい響きはもちろん、3 人のインタープレイが大きな聴きどころ。




## Stan Getz & Joao Gilberto
スタン・ゲッツ & ジョアン・ジルベルト

**Getz=Gilberto**

1963 年録音。ゲッツのテナーとジルベルトのギター、歌、そしてアントニオ・カルロス・ジョビンの作編曲が結びついたボサノヴァの代表作。〈イパネマの娘〉をはじめ、柔らかなリズムと洗練された響きが心地よい。ジャズとブラジル音楽の出会いを象徴する名盤。




## Herbie Hancock
ハービー・ハンコック

**Maiden Voyage**

1965 年録音。ハンコック、フレディ・ハバード、ジョージ・コールマンたちによるクインテットの名盤。海をテーマにした表題曲をはじめ、モードを基盤とする楽曲が並ぶ。マイルスの下で培った経験を生かしながら、ハンコックがみずからの音楽を確立してみせる。




## Keith Jarrett
キース・ジャレット

**The Köln Concert**

1975 年、ケルンで行なわれたソロ・ピアノの即興演奏を収録。予定外のピアノや体調不良など、困難な状況から生まれたにもかかわらず、ジャレットは長大な即興を美しい音楽へと変えていく。ジャズを超えて広く聴かれた記念碑的作品。




## Charles Mingus
チャールズ・ミンガス

**Pithecanthropus Erectus** (直立猿人)

1956 年録音。ミンガスの代表作で、作曲家としての個性が本格的に開花した作品。表題曲では人類の進化と崩壊を音楽で描き、即興と作曲を大胆に融合している。ジャッキー・マクリーンらとの演奏も力強く、独創的なミンガスの世界が凝縮されている。




## Thelonious Monk
セロニアス・モンク

**Monk's Music**

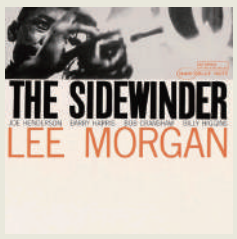
1957 年録音。モンクの独特な作曲とピアノを、ジョン・コルトレーンを含むビッグ・コンボが支える。〈ウェル、ユー・ニードント〉など、お馴染みのオリジナルが大胆なアレンジで生まれ変わる。硬質でユーモラス、そして予測不能なモンクの魅力が満載。




## Wes Montgomery
ウェス・モンゴメリー

**A Day In The Life**

1967 年録音。ウェスがオーケストラをバックに、ザ・ビートルズの表題曲などを取り上げる。親しみやすい選曲ながら、オクターヴ奏法によるギターの響きは鮮烈この上ない。ジャズ・ギターの可能性を広げながら、ポップな魅力も兼ね備えた人気盤。




## Lee Morgan
リー・モーガン

**The Sidewinder**

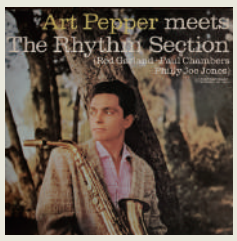
1963 年録音。表題曲のファンキーなリズムが大きな話題となり、モーガンを代表するヒット作になった。ジョー・ヘンダーソンやバリー・ハリスたちとの演奏は、ハード・バップの熱気と R&B 的な親しみやすさを兼ね備える。60 年代ジャズの勢いを感じさせる一枚。




## Charlie Parker
チャーリー・パーカー

**Now's The Time**

1952 ～ 54 年録音。パーカーの代表的な演奏をまとめた作品で、ビバップの核心を味わうことができる。高速で複雑なフレーズを自在に操りながらも、その音楽には強い歌心がある。のちのジャズ・ミュージシャンに与えた影響の大きさも計り知れない。




## Art Pepper
アート・ペッパー

**Meets The Rhythm Section**

1957 年録音。ペッパーがマイルスのリズム・セクション――レッド・ガーランド、ポール・チェンバース、フィリー・ジョー・ジョーンズと共演した名盤。十分な準備がないまま録音に臨んだとされるが、ペッパーが見事な演奏を聴かせる。




## Oscar Peterson
オスカー・ピーターソン

**We Get Requests** (プリーズ・リクエスト)

1964 年録音。ピーターソン、レイ・ブラウン、エド・シグペンによる黄金のトリオが、スタンダードを中心に洗練された演奏を聴かせる。抜群のテクニックを誇るピーターソンだが、ここでは技巧を前面に出しすぎず、メロディの美しさを生かしてみせる。




## The Scene Changes
バド・パウエル

**The Amazing Bud Powell Vol.5**

1958 年録音。パウエルが残した晩年の代表作のひとつで、〈クレオパトラの夢〉が日本では人気が高い。パウエルの独特なフレージングが印象的で、この時期にしては力強いタッチと歌心が絶妙なバランスで表現されている。




## Sonny Rollins
ソニー・ロリンズ

**Saxophone Colossus**

1956 年録音。ロリンズの代表作で、トミー・フラナガンとの共演も印象に残る。大ヒットした〈セント・トーマス〉のカリプソから〈ブルー・セヴン〉の深い即興まで、ロリンズの幅広い表現力が味わえる。豪快でありながら知的、そんな魅力が凝縮された歴史的名盤。



## Horace Silver
ホレス・シルヴァー

**Song For My Father**

1963 ～ 64 年録音。ファンキーな作曲家としての魅力が際立つシルヴァーの代表作で、表題曲は後世まで演奏され続ける名曲となった。ジョー・ヘンダーソンらとの演奏には、ハード・バップを基盤にした強いグルーヴがある。親しみやすさと高度な音楽性を兼ね備えた傑作。


小川隆夫（おがわ・たかお）
1950 年東京生まれ。音楽ジャーナリスト、整形外科医、ギタリスト。77 年東京医科大学卒業。81 ～ 83 年、ニューヨーク大学大学院留学。帰国後ジャズを中心とした原稿の執筆、インタヴュー、翻訳、イヴェント・プロデュースなどを開始。レコード・プロデューサーとしても多くの作品を制作。『ブルーノートの真実』（東京キララ社）、『証言で綴る日本のジャズ』（駒草出版）、『マイルス・デイヴィスの真実』（講談社 文＋α庫）、『ジャズメン死亡診断書』『ジャズ超名盤研究（1～3）』『ビバップ読本 証言で綴るジャズ史』『伝説のライヴ・イン・ジャパン 記憶と記録でひもとくジャズ史』『マイルス・デイヴィス大事典』『来日ジャズメン全レコーディング 1931-1979』『ジャズ・クラブ黄金時代 NY ジャズ日記 1981-1983』『決定版 ブルーノート 1500 シリーズ完全解説』『レーベルで聴くジャズ名盤 1374』『同 Part2』（いずれもシンコーミュージック・エンタテイメント）など著書も多数。マイルス・デイヴィス生誕 100 年の 2026 年 5 月には、『マイルスが語ったすべてのこと～マイルス・スピークス』（小学館文庫）、『マイルス・デイヴィスとモダン・ジャズの時代』（小学館）、『マイルス・デイヴィス大百科』（シンコーミュージック・エンタテインメント）を出版。2016 年にはエレクトリック・マイルスにオマージュしたバンド、Selim Slive Elementz を結成。2019 年 8 月に 2 作目『VOICE（Ultra-Vybe）』を発表した。